

E 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は1〜3となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しすぎはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
○ 1
○ 2
● 3
○ 4
○ 5

(3と解答する場合)

— 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

だいぶ以前に、農学専門のある先生から興味深い話を聞いたことがある。

その先生が留学していた頃、アメリカで人間の動物観を研究するというプロジェクトがあった。そのやり方は、例えば「一番美しい動物は何か」といったような質問を並べてアンケート調査を重ね、その答えが年齢、性別、職業、宗教、民族などどのように違うか調べるのだという。

このことを聞いて、それは面白そうだから日本でも同じような調査をしようという話になった。うまく行けば日米比較文化論になるかもしれない。というわけでさっそく試みたのだが、⁽¹⁾これがどうもうまく行かない。アメリカでなら「一番美しい動物は」ときけば、すぐ「馬」とか「ライオン」とか、何か答えが返って来る。ところが同じ質問を日本人にすると、「さあ、何だろうな」とはなはだ歯切れが悪い。そこを無理に、何でも一番美しいと思うものを挙げてほしいと言うと、「そうだなあ、夕焼けの空に小鳥たちがばあつと飛び立っているところかな」といったような答えになる。「これでは比較は無理だから、結局アキラめきました」とその先生は苦笑していた。

私がこの話を聞いて興味深いと思ったのは、それが動物観の差異以上に、日本人とアメリカ人の ① の違いをよく示すものと思われたからである。

アメリカも含めて、西欧世界においては、古代ギリシャ以来、「美」はある明確な秩序を持ったもののなかに表現されるといふ考え方が強い。その秩序とは、左右相称性であったり、部分と全体との比例関係であったり、あるいは基本的な幾何学形態との類縁性など、内容はさまざまであるが、いずれにしても客観的な原理に基づく秩序が美を生み出すという点においては一貫している。逆に言えば、そのような原理に基づいて作品を制作すれば、それは「美」を表現したものとなる。

典型的な例は、現在でもしばしば話題となる八頭身の美学であろう。人間の頭部と身長が一对八の比例関係にあるとき最も美しいという考え方は、紀元前四世紀のギリシャにおいて成立した美の原理である。ギリシャ人た

ちは、このような原理を「カノン（規準）」と呼んだ。「カノン」の中身は場合によっては変わり得る。現に紀元前五世紀においては、優美な八頭身よりも莊重な七頭身が規準とされた。だが七頭身にせよ八頭身にせよ、何かある原理が美を生み出すという思想は変わらない。⁽²⁾ギリシヤ彫刻の持つ魅力は、この美学に由来するところが大きい。

もつとも、この時期の彫刻作品はほとんど失われてしまつて残っていない。残されたのは大部分ローマ時代のコピーである。しかししばしば不完全なそれらの模刻作品を通して、かなりの程度まで原作の姿をうかがうことができるのは、美の原理である「カノン」がそこに実現されているからにほかならない。原理に基づいて制作されている以上、彫刻作品そのものがまさしく「美」を表わすものとなるのである。

だがこのような実体物として美を捉えるという考え方は、日本人の美意識のなかではそれほど大きな場所を占めているには思われない。日本人は、遠い昔から、何が美であるかということよりも、むしろどのような場合に美が生まれるかということにその感性を働かせて来たようである。それは「実体の美」に対して、「状況の美」とでも呼んだらよいであろうか。

例えば、「古池や蛙飛びこむ水の音」という一句は、「古池」や「蛙」が美しいと言っているわけではなく、もちろん「水の音」が妙音だと主張しているのでもない。ただ古い池に蛙が飛びこんだその一瞬、そこに生じる緊張感を孕んだ深いセイジャクの世界に芭蕉はそれまでにない新しい美を見出した。そこには何の実体物もなく、あるのはただ状況だけなのである。

日本人のこのような美意識を最もよく示す例の一つは、「春は曙、やうやうしろくなりゆく山ぎはすこしあかりて……」という文章で知られる『枕草子』冒頭の段であろう。これは春夏秋冬それぞれの季節の最も美しい姿を鋭敏な感覚で捉えた、⁽³⁾いわば模範的な「状況の美」の世界である。すなわち春ならば夜明け、夏は夜、そして秋は夕暮というわけだが、その秋について、清少納言は次のように述べている。

秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるがいとちひさく見ゆるは、いとをかし……。

これはまさしく「夕焼けの空に小鳥たちがばあつと飛び立っているところ」というあの現代人の美意識にそのままつながる感覚と言つてよいであろう。日本人の感性は、千年の時を隔ててもなお変わらずに生き続けている。「実体の美」は、そのもの自体が美を表わしているのだから、状況がどう変わろうと、いつでも、どこでも「美」であり得る。《ミロのヴィーナス》は、紀元前一世紀にギリシャの植民地であった地中海のある島で造られたが、二一世紀の今日、パリのルーヴル美術館に並べられていてもその美しさに変わりはない。仮に砂漠のなかにぽつんと置かれても、同じように「美」を主張するであろう。だが「状況の美」は、状況が変われば当然消えてしまう。春の曙や秋の夕暮れの美しさは、長くは続かない。状況の美に敏感に反応する日本人は、それゆえにまた、美とは万古②易のものではなく、うつろいやすいもの、はかないものという感覚を育てて来た。うつろいやすいものであるがゆえに、いつそう貴重で、いつそう愛すべきものという感覚である。日本人が、春の花見、秋の月見などの季節ごとの美の鑑賞を、年中行事として特に好んで今でも繰り返しているのも、そのためである。

実際、清少納言が的確に見抜いたように、日本人にとっての美とは、季節の移り変わりや時間の流れなど、自然の営みと密接に結びついている。そのことは江戸期に広く一般大衆のあいだで好まれた各地の名所絵を見ればよくわかる。

名所絵とは、文字通りそれぞれの土地において見るべき場所、訪れる価値のある所を描き出したものだが、単なる場所ではない。例えば、広重の晩年の名作《名所江戸百景》を見てみると、雪晴れの日本橋とか、花の飛鳥山など、季節ごとの自然と一つになった情景が描き出されている。事実この連作シリーズは、まとまったかたちとしては、春夏秋冬の四部に分類されている。しかしそのように分類したのは広重ではない。広重は、江戸のな

かを見るべき場所を、特に順序立てずに、いわば思いつくままばらばらに描き出して行った。それが好評であったので、次々と続けて、百十八点まで描いたところで彼は世を去った。その後版元が、別の画家に追加分を一点と扉絵の制作を依頼し、あわせて計百二十点の「揃物」として刊行したが、そのときに内容を四季に分類したのである。ということは、当初ばらばらに描いた「名所」が、いずれも季節の風物や年中行事と結びついていたので、自ずから分類が成り立ったということである。つまり名所そのものが、江戸の町と自然との結びつきによって生まれて来たのである。

かつての名所絵がそうであったように、今日でも人々は、旅をするとその記念や土産ものとして、土地の観光絵葉書を買って求める。パリやローマに行くと、土産物屋の店先にさまざまな絵葉書が並んでいるが、そのほとんどは、ノートルダム大聖堂とか、凱旋門とか、エッフェル塔など、代表的なモニュメントをそのまま捉えたものである。だが日本の観光絵葉書を見てみると、満開の桜の下の清水寺とか、雪に覆われた金閣寺など、季節の粧いをこらしたものが圧倒的に多い。もちろん、清水寺も金閣寺も、それ自体見事な建築だが、観光写真はそこに自然の変化を組み合わせることを好むのである。それもまた、「状況の美」を愛する日本人の美意識の表われであろうか。

(高階秀爾『日本人にとって美しさとは何か』による)

問

- (A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)
- (B) 線部(a)・(b)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。
- (C) 線部(1)について。その理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 日本人は論理より情緒を重んじるので、動物名を具体的に考えないから。

2 日本人は動物にあまり興味を持たないので、すぐに個別の動物名を挙げないから。

3 日本人は具体的な好悪の表現を避け、動物名を挙げたがらないから。

4 日本人は場面とともに動物を思い浮かべ、動物名だけを答えないから。

5 日本人は動物を擬人化しがちなので、動物名をそのまま挙げないから。

(D) 空欄①にはどのような言葉を補ったらよいか。最も適当な言葉を本文中から抜き出し、漢字三字で記せ。

(E) 線部(2)について。ここで言う「美学」とはどのようなものか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 彫刻家一人一人が独自の原理を貫くことで美が生まれるという考え方。

2 堅固な石材で造ることで美が保たれるという考え方。

3 客観的な原理に基づく秩序から美しさが生じるという考え方。

4 古代ギリシャ彫刻の八頭身が時代を超えた美を表すという考え方。

5 作品を鑑賞する人々の感性こそが美を生み出すという考え方。

(F) 線部(3)について。「状況の美」の説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 清少納言を基準として四季それぞれの場面に美を見いだすこと。

2 場面ごとのつながりの中に常に美しさを見いだすこと。

3 実体的なものを避け、その場面の雰囲気の中に美を見いだすこと。

4 『枕草子』における「いとをかし」にならって日本固有の風情に美を見いだすこと。

5 場所と自然が一つになった情景に美しさの核心を見いだすこと。

(G) 空欄②に漢字一字を補い、四字熟語を完成させよ。

(H) 線部(4)について。その説明として最も適當なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 世界的な大都市だった江戸には、今の東京より自然が豊富だった。

2 広重らの名作によって、各地のモニュメントが自然と一つになった情景が見事に描き出されていた。

3 江戸の人々の生活の時間と対応した情景が名所として意識された。

4 見るべき場所、訪れる価値のある所がはじめから季節ごとに決まっていた。

5 《名所江戸百景》が広重の死後に「揃物」として刊行され、人々の意識に影響を与えた。

(I) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 《ミロのヴィーナス》は、置かれる場所に関係なく、その「美しさ」を主張することができる。

ロ 芭蕉の俳句では、「古池」や「蛙」という実体的な物と「水の音」を結びつけた点に新しい美を見いだすことができる。

ハ ローマ時代の彫刻は、ギリシャ時代の模刻作品にすぎず、そこに一貫した美の原理を見いだすことはできない。

ニ 西欧世界の美の原理によれば、美術作品が失われれば美そのものも失われる。

ホ 日本人には、状況が変われば消えてしまうものが貴重で愛すべきものという感性がある。

二 左の説明と文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

〔説明〕

日清戦争後、中国の都市大連(ロシア名「ダーリニ」)を租借地としたロシアは、パリをモデルにした都市計画を立案し、日露戦争後に租借権を得た日本が、その計画を引き継ぐかたちで都市建設を実行した。中山広場(ロシア名「ニコライエフスカヤ広場」)は大連の中心部に位置しており、広場を取り囲んでいた近代的な建物の多くは今も残っている。文中の「大連賓館」(元の「ヤマトホテル」)、「中国銀行大連分局」(元の「横浜正金銀行支店」)もその一部である。筆者は、一九二二年、大連に生まれ、敗戦後に本土に引き揚げた経験を持っている。この文章は、その後三十数年ぶりの大連訪問を契機として執筆されたものである。

〔文章〕

私は大連賓館の真向かいになる中国銀行大連分局を眺めていて、ふと、遙かに遠い二十歳の夏に書いたある詩のことを思い出した。その記憶は、どうやらしばらく前から、浮かびあがろうとして微かな身もだえをつづけ、ちよūdōよい瞬間を捉えたようであった。というのは、四十年前のその夏のある日、私は同じような視点を取りながら、——ヤマトホテルの正面玄関からまっすぐ横浜正金銀行支店の正面玄関へ向かう線に重なる広場の中の通路を歩きながら、その詩のモチーフが芽生えてくるのを覚えたからである。

夏休みであった。東京の旧制高校の二年生であった私は、大連の実家に帰省していた。自宅からいちばん(1)ハシカな街の書店やレコード店に行くときは、広場の中のもの通路を歩くという、中学時代から習慣の最短の道順を取っていた。私はその前年から、学校の雑誌などに詩を書いていた。(a)口語自由詩であった。二年生になったころ、敬愛する漢文の先生から、文語の詩が書けないとだめだと言われた。私はその言葉を鵜呑みにし、夏休みに入ると、文語の詩の試みに熱中していた。私が大広場でモチーフの芽生えてくるのを覚え、その後数日かかって仕上げた詩はこんなものである。

円き広場

わがふるさとの町の中心
美しく大いなる円まるき広場

そは 真夏の正午の

目覚めのごとく

十条の道を放射す

即すなはちまた そのままにて

十条の道を吸収す

おお 遠心にして求心なる

ふるさとの子 二十はたち歳

幼き日よりの広場に

はじめて眩暈めまひし 佇たたずむ

意識の円まるき核の

かくも劇的なる

膨脹ふくらみと同時の収縮ちぢまりを

かつて詩にも 音楽にも

恋にも 絶えて知らざりき

円形の広場から放射状に発する十条の道路、幼いときから見なれているその故郷の光景に、二十歳になった青年がはじめて深い精神的な意味を暗示され、その新鮮さに眩暈する。⁽¹⁾——このようなことを描こうとした詩であるが、四十年も経つてから作者がその言葉の群れを呼び戻すとき、まず感じることは、表面にあらわれている影響で、このことは他人にも見当が付きやすいのではないかと思われる。私は、フランスのある批評家が詩作における意識の充実のさせ方について述べた意見を、私のこの詩の主題が裏面に秘めている素材として思いださないわけにいかない。彼の意見によると、その意識の充実のさせ方には、西洋型と東洋型のちがいがある。もちろん、これは図式であつて、個人差を考慮しないことなどいろいろと欠陥を免れたいが、なかなかの眞実を含むものと思われた。

意識の内容を大きな円であらわし、意識の中心となる核を同心のたいへん小さな円であらわすとき、西洋型とは、小さな円を膨脹させて大きな円に合致させようとするものである。つまり、どこまでも意識的になろうとする。これにたいし東洋型とは、小さな円を収縮させてゼロにしようとするものである。つまり、どこまでも無意識的になろうとする。おもしろいことに、両者の理想の形はひとしい。それは到達不可能かもしれないが、大きな円だけの形となることだ。東洋型と西洋型のどちらの方向を取るにせよ、小さな円**(b)**の存在を隠し持っている、あるいは大小二つの円の関係を隠し持っている、この目標としての大きな円こそ、意識の渾然とした充実をあらわしている。

ざつとこのようなことをそのフランスの批評家は述べていたわけで、二十歳の私はその図式に強く惹かれ、自分分は、詩を作る場面は西洋型のように、音楽を聞く場合は東洋型のようにだなどと思つていた。そして、ほかの場合の意識の充実のさせ方についてはほとんど関心がなかつた。そんなふうには、いわば文学芸術の内部にばかり生きてきたがつているような、夢想の好きな青年が、かつての大広場の中に佇み、まるで啓示を受けたかのように、円形の広場に意識の核の暗喩を覚え、その核の膨脹と収縮に、十条の道路の放射と吸収がそれぞれ対応していると感じたのであつた。そして、放射と吸収が、美しいと呼ぶほかはないような、まったく力の均衡を演じていると

思ったのである。——すさまじくも新しい外部の現実には、おのれの孤独な全存在をもって対決するためには、意識の中心の核の膨脹と収縮を、眩暈するほど活潑に、同時共存させなければならぬのか？ 人間にとってそれは不可能ではないか？ しかし、青春が思い描くに足りる一つの究極の形態ではあるにちがいない。

二十歳の私は、この大広場とそこから放射状に発している十条の道路、大広場を円陣で囲むすばらしい建物の群れ、そしてアカシヤの並木などは、ロシアの残した都市計画の多くのものを引き継いだ日本が、たぶんロシアの夢を超える見事な出来ばえで実現したものの一つであるということを、詳しいところまではともかく粗筋で知っていた。また、ロシアが描いたダリーニの形態には、パリの魅惑がいろいろ投影されていたということ、たとえばニコライエフスカヤ広場のモデルはパリのエトワール広場であったということも知っていた。一口で言えば、大連のほかの場所とは比較できないほど色濃く、大広場にはヨーロッパが隠されているということを知っていた。そういうわけで、きびしい外部の現実にかかわる自分なりの一つの目覚めらしいものが、ほかならぬ大広場で起こったということに、二十歳の私はある微妙な、他人には伝えにくい、そのため秘密のようにもなってしまう喜ばしさを覚えたものであった。

そのときから四十年も経ち、私はほぼ同じ視点で中国銀行大連分局を眺めたわけである。「円き広場」の実物が今度は全部視野の中に入っていた。その詩作にかかわる記憶のよみがえりは、全身に沁みとおるよう懐かしかった。もちろん、ここで記したようにこまごまと詩作の経緯の思い出をたどったわけではない。思い出は私の中を、せいぜい蝶が舞うほどの身ぶり⁽¹⁰⁾とゆるやかさで通り過ぎて行つたにすぎない。

しかし、この束の間のせつないツイカイは、中山広場への、まるで青春期におけるような親しみをもたらしただ。初冬の午前の広場における、植込みの中の土壌の手ざわり、乾いて澄んだ空気の匂い、常緑の樹木の葉のつややかな光、舗装された通路の冷たい固さなど、そうしたもののすべてが、私の感覚に生き生きと迫ってくるような雰囲気になった。

私は複雑な思いに打たれた。四十年前とは決定的に異なるつぎのような考えを、もう一方において抱いていた

からである。——この中山広場とそこから放射状に発する十条の道路は、かつてたしかに日本の管理、資本、技術によって建設されたものであった。用いられた設計はほとんど、ロシアが残していたものであった。その設計に含まれていた主な特徴は、フランスの首都に学んだものであった。今も、それら三つの国の影をそれぞれに濃淡のちがいはあるが、私は眼前の空間に透かして眺めることができる。しかし、これらの広場と十条の道路の築造に参加した労働者は、ほとんどが中国人であった。この都会の土地の以前の所有者である中国の人民であった。現在、広場も十条の道路も、いや大連全体が中国のものに戻っていることは、まさしく歴史の審判なのだ。

私は矛盾していた。中山広場を形づくる空気、土壌、樹木、舗装の道路などに感じた深く本能的な親しみを、眼前の光景全体の人為的な構成が重層的にかたどる歴史の真実によって、ただちに抑えていたのである。

(清岡卓行「中山広場」による)

問

- (A) 〰〰〰 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)
- (B) ~~~~~ 線部(a)・(b)について。本文中の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、それぞれ番号で答えよ。

(a) 口語自由詩

- | | |
|---|------------------------|
| 1 | 主に現代語を用いた形式的な決まりのない詩 |
| 2 | 伝統的な詩の決まり事からの脱出を目指した詩 |
| 3 | 主に会話体を用いて日常的な主題を中心にした詩 |
| 4 | 新しい言葉を用いて現代人の精神を表現した詩 |
| 5 | 主に話し言葉を用いた主題の制限のない詩 |

- (b) 渾然とした
- | | |
|---|-------------|
| 1 | 美しく光りかがやいた |
| 2 | 異質な要素のきわだった |
| 3 | 力のみなぎった |
| 4 | 何となくぼんやりとした |
| 5 | 複数のものがとけあつた |

(c) 線部(1)について。「深い精神的な意味」の内容として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 東洋型と西洋型の意識の充実のさせ方は、正反対の方向性を持っているが、意識の大きな円という形を理想とする点では同じ目標を目指しており、それぞれの役割を果たしていること。
- 2 詩作における意識の充実のさせ方には、中心となる核を意識全体の大きな円に合致させる西洋型と、意識を収縮させることで大きな円だけの形にする東洋型の二つがあること。
- 3 詩作の場で、どこまでも意識的になることで意識を充実させる力と、無意識的になることで意識を充実させる力が、緊張関係をともなうて均衡しうること。
- 4 すさまじくも新しい外部の現実におけるの孤独な全存在をもって対決することは、青春が思い描くに足りる究極の形態であるにちがいないこと。
- 5 大広場と放射状に延びる十条の道路が、大連のほかの場所とは比較できないほど色濃く、フランスをはじめとしたヨーロッパの精神を隠していること。

- (d) 線部(2)について。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。
- 1 詩作の場合はいくまでも意識的であろうとし、音楽を聞く場合は意識を無にしようとしていた。
 - 2 西洋型の意識の充実のさせ方と東洋型の意識の充実のさせ方の違いには、あまり興味を感じなかった。
 - 3 詩作の場合は意識の内容を大きな円にしようとし、音楽の場合は意識の内容を小さな円にしようとした。

4 詩作の場合は西洋的なものに惹かれその影響を受け、音楽の場合は東洋的なものに惹かれていた。

5 詩作の場合の意識の充実のさせ方と音楽を聞く場合の意識の充実のさせ方を、使い分けようとしていた。

(E) 線部(3)について。私が「啓示を受けたかのように」感じたことの内容を次のようにまとめた。空欄

にはどのような言葉を補つたらよいか。句読点とも二十字以内で記せ。

円形の広場から放射状に十本の道路の延びる様子は、、しかも、拡大させる力と縮小させる力が完全に釣り合っている。

(F) 線部(4)について。その理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 私が幼いときから見なれており、他人とは共有しにくい個人的な思い出を積み重ねてきた大広場が、詩作にかかわる自分なりの目覚めの舞台となったから。

2 日本もその建設に関わった大広場に、ほかの場所とは比較できないほど色濃くヨーロッパが隠されていたことを、私は他人になるべく知られたくない大切な秘密のように考えたから。

3 幼いときから見なれていた風景であったにもかかわらず、外部の現実にかかわる自分なりの目覚めという重大な出来事が、二十歳になって初めて起こったことに照れくささを感じたから。

4 詩作にかかわる意識の目覚めが日本と西洋の文化的融合を体現する場所で起こったことは、私と西洋との特別なつながりの暗示のようであり、微かな優越感の根拠となったから。

5 大広場がロシアの残した都市計画をロシアの夢を超える出来ばえで日本が実現したものであり、色濃くヨーロッパを隠したものであることを、私のまわりの人々は知らなかったから。

(G) 線部(5)について。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 日本、ロシア、フランスという三つの国の影に加えて、都市建設に参加した土地の元の所有者である中国人の存在に気づいて、都市の光景のかたどる歴史の真実がよりわかりにくいものになってしまった。

2 中山広場に対する青春期の私の深い親しみ、そして今も生き生きと迫ってくる故郷という感覚と、大連が

まぎれもなく中国である事実との隔たりを、感情の中でうまく整理できない状況にあった。

3 大連の都市建設が、その土地の元の所有者である中国の人民によってなされた事実によって、大連の風景にヨーロッパの影を見た私の印象が表面的なものに過ぎなかった事実を突きつけられて困惑した。

4 大連全体を中国のものとする歴史の審判は、今も都市の風景に日本、ロシア、フランスの三つの国の影をそれぞれの濃淡で認める私にとって受け入れがたいものであった。

5 大連の都市の空間に透かして眺めた、日本、ロシア、フランスの三つの国の影が、四十年という時の経過によって、まぎれもない中国の都市という印象に変化したことにとまどっていた。

(H) 左記各項のうち、本文の内容と合致するもの一つを選び、番号で答えよ。

1 横浜正金銀行支店に向かう通路を歩いている時、私は二十歳の夏の詩作の細かい経緯を思い出した。

2 旧制高校在学中に詩作をはじめた私は、当時評価されていた文語の詩が書けないことで苦勞していた。

3 二十歳の私は、詩と音楽にしか興味を持たない、文学芸術の世界で生きたがる夢想好きの青年であった。

4 大連にヨーロッパを隠した都市を建設するというロシアの夢は、中国の人民によって引き継がれた。

5 現在の大連の光景全体が主張する歴史の真実は、私がこの都市に感じた本能的な親しみと矛盾していた。

三 左の文章は、須磨に流された光源氏が明石の入道に娘（のちの明石の君）を寄越すように語る場面を描いた『源氏物語』の一節である。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

明石には、例の、秋は浜風の異なるに、ひとり寝もまめやかにものわびしうて、入道にも、をりをり語らはせたまふ。「とかく紛らはして、こち参らせよ」とのたまひて、渡りたまはむことをば、あるまじう思したるを、さうじみ、はたさらに思ひたつべくもあらず。いとくちをしき際の田舎人こそ、かりに下りたる人のうちとけ言につきて、さやうに軽らかに語らふわざをもすなれ、人数にも思されざらむものゆゑ、我はいみじきもの思ひをや添へむ、かく及びなき心を思へる親たちも、世ごもりて過ぐす年月こそ、あいな頼みに行く末心にくく思ふらめ、なかなかなる心をや尽くさむと思ひて、ただこの浦におはせむほど、かかる御文ばかりを聞こえかはさむこそ、おろかならね、年ごろ音にのみ聞きて、いつかはさる人の御ありさまを、ほのかにも見たてまつらむなど思ひかけざりし御住まひにて、まほならねどほのかにも見たてまつり、世になきものと思ひ伝へし御琴の音をも風につけて聞き、明け暮れの御ありさまおぼつかなからで、かくまで世にあるものと思したづぬるなどこそ、かかる海人の中に朽ちぬる身にあまることなれ、など思ふに、いよいよ恥づかしうて、つゆもけ近きことは思ひよらず。

親たちは、⁽⁹⁾ここらの年ごろの祈りのかなふべきを思ひながら、ゆくりかに見せたてまつりて思し数まへざらむ時、いかなる嘆きをかせむと思ひやるに、ゆゆしくて、めでたき人と聞こゆとも、⁽¹⁰⁾つらういみじうもあるべきかな、目に見えぬ仏神を頼みたてまつりて、人の御心をも宿世をも知らで、なごうち返し思ひ乱れたり。君は、「このごろの波の音に、かの物の音を聞かばや。さらずはかひなくこそ」など常はのたまふ。

(注) 1 さうじみ——本人、当人の意。

2 世ごもりて——未婚での意。

3 あいな頼み——あてにならない頼みの意。

問

(A) ——— 線部(1)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 けだかく
- 2 気にせず
- 3 いたしかたなく
- 4 ますます
- 5 本当に

(B) ——— 線部(2)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 明石にお出かけになられること
- 2 ここでお亡くなりになられること
- 3 この世に生きていらっしやること
- 4 田舎で暮らしていらっしやること
- 5 一人で過ごしていらっしやること

(C) ——— 線部(3)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 はつきりと断ることなどできない
- 2 思いを寄せるつもりなどない
- 3 思い切って出かける気にもなれない
- 4 縁を切ってしまうはずなどない
- 5 物思いにくれているのではよくない

(D) ——— 線部(4)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 つらくせつない
- 2 満足できない
- 3 あきらめきれない
- 4 望みがない
- 5 取るに足りない

(E) ——— 線部(5)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 将来が知りたいと思う
- 2 将来が気がかりだと思う
- 3 将来が安泰であると思う
- 4 将来を楽しみだと思う
- 5 将来に希望がもてないと思う

(F) ——— 線部(6)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 軽々しくはないが
- 2 なみなみではないが

- 3 下手ではないが
4 浅はかではあるが
5 本意ではあるが

(G) 線部(7)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 知りたく思われて
2 はつきりわからずに
3 気がかりになって
4 十分にうかがえて
5 とてもすばらしくて

(H) 線部(8)について。なぜ「つゆもけ近きことは思ひよらず」という気持ちになるのか、本文に即してその理由に合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

- イ 両親が喜ぶ結婚であるが、いずれは捨てられて悲しませることになるから
ロ 経済的な余裕がないままに、高貴な世界で結婚生活など続けられそうにないから
ハ 自分の存在を認めてくれるだけでも、十分に身に余る光栄であると思われるから
ニ 噂に聞いていた光源氏の姿を直接に見て、自分との育ちの違いを痛感したから
ホ 田舎者ということで蔑み侮られていることに心底耐えられないと感じているから

(I) 線部(9)の現代語訳を五字以内で記せ。

(J) 線部(10)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 たいそう思いやりのないひどい仕打ちであったことよ
2 信じられないほどすばらしい方でいらっしやったことよ
3 まことに心苦しく恐れ多いことに違いないことよ
4 さぞかし薄情で冷淡な扱いを受けることだろうよ
5 たいへん恨めしく悲しいことに違いないことよ

(K) 線部(イ)・(ロ)はそれぞれ誰の動作・行為か。左記各項の中から最も適当なもの一つずつ選び、番号で

答えよ。ただし、同じ番号を二度用いてもよい。

- 1 光源氏
- 2 入道
- 3 明石の君
- 4 親たち
- 5 田舎人

(L) 線部(a)と(c)の文法上の意味として最も適当なものを、左記各項の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

- 1 断定
- 2 伝聞
- 3 現在推量
- 4 完了
- 5 当然

【以下余白】